

## 詩歌・小説の中のはきもの (第30回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

290 少年はガラス扉を抜け、物静かに  
ビュフェを斜めに横切って、姉さんたち  
のテーブルに行った。その歩き方には、  
上体の姿勢にも、膝の曲げよう、白い靴  
をはいた足の運びようにも、稀なほどの  
優雅さがあり、ひどく軽やかで、花車な  
うえに誇らしげで、途中二度ビュフェの  
なかを見回して眼を挙げ眼を伏せた…。  
トーマス・マン

★『ヴェネツィア客死 (圓子修平訳)』から。人物を描写するには靴そのものよりも、歩く姿の方が優れている。人の歩き方はその人固有のものである。私は通勤時に、すれちがう人、前を行く人の「歩容」から、その人の性格を想像するのが楽しみの一つだった。

291 1973年の秋には、何かしら底意地の悪いものが秘められているようであった。まるで靴の中の小石のように鼠にははっきりとそれを感じ取ることができた。その年の短い夏が9月始めの不確かな大気の揺らめきに吸い込まれるように消えた後も、鼠の心は僅かばかりの夏の名残りの中に留まっていた。  
村上春樹

★『1973年のピンボール』から。湿気の多い日本では、ルーズフィットが好まれるから、靴の中にしばしば小石が入るものだが、小説の中では初めて見つけたので収録した。この年の5月に小説の主人公「僕」は、新しいコードヴァンの靴をおろしている。コードヴァンの靴も、日本の小説の中に初めて見つけた。踵を踏まれて靴が脱げた(脱

げかかった)というのまだ見つけていない。

292 製革志初遂 革を製するの志初めて  
遂ぐ  
防洋功乃成 洋を防ぎ功すなわち成る  
力足過洋製 力洋製をとどむるに足る  
義能勵内工 義よく内工にはげむ  
西村勝三

★明治3年、西村は製革場を開設した。軍靴は早くも明治4年に兵部省に納入できるまでになっていたのに比べ、製革は遅れをとっていた。外国人技師の指導を受けたり、技師を外国に派遣し研鑽させていたりしていたが、底革、中底革の良質なものがなかなか国産できず輸入に頼っていた。明治22年に至り、漸く陸軍省の検査に合格する。この漢詩には宿望を遂げた西村の自負と喜びが溢れている。訓み下しは堀田正久。元佐倉市長、正睦公の末裔で大変な教養人であった。

293 脇腹を下にして寝ていると、頭の下に、上着で靴をくるんだその上にズボンを折り重ねて枕にしたふくらみを感じられ、横腹には、服をぬぐとき革サックからとりだして革紐で右の手首に巻きつけておいた大型拳銃の金属が冷たく感じられた。

アーネスト・ヘミングウェイ

★『誰がために鐘は鳴る (大久保康雄訳)』から。草をしとね、登山靴を枕にして大地を背にして寝る。若いときそんな山旅を何度したことか。自然と一体化した気分というのは快樂の極みである。山男にとって、

ピッケルや靴と一緒に高所に登る同志なのである。「靴を枕」にすることは、たくさんの人が経験している筈なのに小説には余り書かれていない。

294 口のくぎみんな打つて靴屋さんおそ  
いおひる 市川一男

作者自解 「口の中一ぱいにほうばった釘を、くちびるで器用に一つずつ取り出しては、トントンと靴の皮に打ちつけていく。幼児の胸掛けに似た仕事着も何かユーモラスで、靴屋さんの仕事場は、子どもの時から楽しかった。靴屋さん自身も自分の仕事が楽しいらしく、釘うつ音はいつも陽気でリズムがうった。そんなわけがつい仕事に身が入って、靴屋さんの昼ごはんはいつもおそくなる。」

★『近代俳句大観』から。無季俳句。いかにも童話作家らしいものの見方である。釘を口に含むのは靴屋に限らず、大工はもちろん素人だってしたことである。かたちだけまねた叩き大工が、咳き込んだ拍子に釘を呑んでしまったなどという話はよく耳にした。このような靴職人の作業のひとこまをとらえてくれた俳人に感謝したい。

295 最初は抵抗のそぶりを見せていた猫っかぶりの靴底が牙をむく。痛みはすべてそこからやってくる。結びあわされた縄が湿りを帯びて縮こまり、水の悪意のなすがままになると、もはや何の呼吸もしなくなる。ゴムの補強が衰れをさそう。この修復不能の災いが、申し訳程度に靴の縁についている近代的な装備なんかで防げるものか。エスパドリーユはエスパドリーユだ。いったん濡れると、ますますうっとうしくなり、泥の匂いにおおいかぶさってくる。空は降り出す気配もないのに、気分は全身ずぶ濡れ、夏はべとつき、砂はねばる。おまけに、もうわかりきっている。エスパドリーユは元どおり乾くことはない。窓の縁や靴箱に置いておくと、全体が縮み、縄目は毛羽立ち、布地は永遠に重く、染みはこぼれる。  
フィリップ・ドレルム

★『ビールの最初の一口』の「エスパドリーユ（縄底靴）を濡らす」から3分の1を抄録。「エスパドリーユをはくと…素足のときの疑り深いかたくなな不安もなければ、立派すぎる靴をはいたときの過ぎた安堵もない」とドレルムはいう。この文章に陶醉して、私は自分の会社で販売していたエスパドリーユをバケツの水に漬けた後、履いてみた。足入れしたときの感触は、湿った便所草履だった。しかし、冷房の利いたオフィスで履いていると冷えが足首あたりまで上がってきて快適だった。ただし数日間、足の裏はブルターニュの麦秋を思わせる薄茶色に染まっていた。

296 朝はふたたびこゝにあり  
朝はわれらと共にあり

……

(リフレイン) 野に出でよ野に出でよ  
稲穂は黄にみのりたり  
草鞋とく結へ鎌も執れ  
風に嘶く馬もやれ

島崎藤村

★『労働雑詠』中の「朝」の第1聯。小学生の時よく唄った歌だが、最近では聴かない。新作の唱歌とばかり思っていたが、早く「草鞋」を履けと唄い込まれているところを見ると、大正期の作品かも知れない。子供のころ畑仕事はいつも裸足だったが、鍬に付く土を足で拭き落とすために片足だけ草鞋を履いたこともあった。

297 日本研究や翻訳で有名なドナルド・キーンさんは、太宰治の『斜陽』を訳す時、「白足袋」という言葉を「白手袋」と変えて“white gloves”と訳しました。華族の奥様のところに往診にやってくる医者が、敬意を表するため白足袋をはいてくるという場面です。日本では、白足袋は正装用なのですが、欧米の“white socks”は非常にカジュアルで、スポーツ用というイメージです。

水野真木子

★『通訳のジレンマ』から。靴についても、スリッパや素足についても、本当は有能

な通訳が必要だったのだ。福沢諭吉などその有能な通訳の1人であったが、彼も西洋の服飾事情の解説を著作にまとめながら、卑俗なことと思っただのか本名を用いなかった。折角多数の英文学者がイギリス本土に留学しながら、靴にまつわる日常的な知識や慣習の比較について触れることが少なかった。今からでも遅くはない、翻訳者は巻末の注解に履物に関する詳しい解説＝通訳をしてもらいたい。

298 靴屋が作った芸術品を、世の人間は足でふむ。同じ仕事の籤をひいた天使がおれを慰めようと天国を拝ましてくれなけりゃ、靴などみんな投げだしたい。だが天国に入れてもらえば世界もおれの足の下。そうなりゃそれで安心するのはハンス・ザックス、靴屋の主人。  
リヒアルト・ヴァーグナー

★『ニュルンベルクの名歌手（高木卓訳）』の第2幕から。パン屋、仕立て屋、金細工師などいろいろな職業の親方であるとともに歌手であった、“マイスタージンガー”の中で最も名前を知られたのは、ハンス・ザックス（1494年～1576年）である。15歳で靴屋の丁稚から職人の親方になり、82歳までに数多くの作詞、作曲をした。それほど彼を有名にしたのはこのヴァーグナーの歌劇によってなのである。

299 玄関と台処は裾を透かした板垣でしたので、私にはその透から来た人の足もとが見えます。すぐ誰だかわかりました。白革の細い鼻緒にまっくろな爪革をかけた足駄、濃い色の合羽、それだけのことで実はいちじるしい特徴を持つ足もとなのです。…傘もきれい、足も人もきれい！と感じました。実際は足だって、まして姿全体など見えもしなかったのですが、そう感じたのです。

幸田 文

★『おしゃれの四季』の「雨の萩」から。柔道の選手は試合中相手の足に眼を集中している。足の動きで相手のかけてくる技が瞬時に予測できるのだ。私は街頭ですれち

がう相手のベルトから下だけ見るということをする。特に履物を見ているのだが、徐々に視線を上げて相手の上半身を眺め、最初に抱いた印象と大きな差が出たことは余りない。ただし、この視線を下から上にあげるのは、大変失礼なことであるから皆さんにはお勧めしない。

300 オランダやベルギーに行くと、木をくりぬいてつくった木靴Holzschuheが目につく。…水気の多いところで使うのに適しているの、ドイツでも魚屋さんや、病院の外科診療室とか手術室で、必ずといっていいほど見かける。手術するドクターの足が滑らぬように、木靴の裏底には刻みを入れている。そして手術室でも農村でも、裸足ではいている。

小塩 節

★『ドイツのことばと文化事典』から。木靴<sup>ホ</sup>を知らない人はいないと思うが、日本でも水を扱う調理人は高下駄を履く。だがドイツの外科医が手術室で履いているのまで知っている人は少ないだろう。外国で自動車事故かスキーで骨折でもしなければ、おいそれと目にすることはできない。筆者はそんな経験をしたのだろうか？

301 道ばたに腰をおろして、ぼくは話をきいていた、あの九月のすてきな夜々、元気づけの酒みたいに、額にしたたる夜露の味を、ぼくは味わっていたものさ。

物の怪めいたかげたちに囲まれながら韻を踏み、片脚を胸もとにまで持ちあげて、豎琴みたいに、破けた靴のゴム紐を引っぱっていたものさ！

アルチュール・ランボー

★『ランボー詩集（粟津則雄訳）』の「わが放浪」の一節。靴が破れるほどの放浪の果ての露営、そこで、夜の闇にかこまれて詩作にふけた幸せを想う。苦しかった時の回想のひとこまに「靴」が出てくるというのがいい。羨ましいくらいだ。振り返って、私にはそのようなしみじみと靴を見つめた経験がない。40年余も製靴会社に働いていたというのにである。